

アユの放流と友釣りを考える会

片野修

アユの放流と友釣りを考える会は1999年に片野が発起人となり、相談役として松宮義晴先生と谷口順彦先生に加わっていただき、長野県水産試験場の皆さまの協力のもと、長野県佐久市で開催されました。アユについての情報提供と懇親会、アユ釣り大会などが主な内容であり、アユ釣り大会の優勝者には松宮杯と大物賞が授与されることになりました。主な参加者は水産研究所や水産試験場の職員とアユ釣りを愛好する大学の研究者です。

なぜ、この会を始めようと思ったかと言うと、アユを愛する研究者が多くいるにもかかわらず、所属先が異なると会って話をする機会は限られ、物足らなく思ったからです。水産試験場には、岐阜県の齊藤薫さんや群馬県の吉澤和俱さんなど、アユについての知識も経験も豊富な先輩が多くおられました。松宮先生と谷口先生もアユ釣りが好きであることが知られており、それを研究にも生かしておられました。水産試験場では新進気鋭の研究者が釣りの技術を磨きつつ、調査や研究でも新しい成果を生み出しつつありました。このような先輩や友人と情報を交換し、技術を磨くことは、研究者の向上にも役立つものです。

アユについては古くから研究されていることから、その生態や利用について、ほとんどすべてのことがわかっていると思われがちです。しかし、実際には縄張りについても不明なことは多く、水産的利用については魚病の蔓延、人工種苗の利用、荒れ果てていく河川環境への対応など、取り組むべき課題は多くあります。アユ釣りの技術についても、日々進歩していますが、おそらくまだ正解はわかっていないと思われれます。その点で、この会を開いて、実際にさまざまな河川で釣ってみることは、調査・研究にも役立つはずで

その後、コロナのために休会となった年もありましたが、毎年1回開催し、昨年の安曇川で23回目を迎えることができました。当初は参加人数が20人を切ったこともありましたが、参加者数は近年の方が多いう傾向があり、30人前後、年によっては40人近くが集まってくれます。1回でも参加したことのある会員は100名を超えているでしょう。

開催地は滋賀県から栃木県、新潟県までの河川であり、長良川、安曇川、神流川などでは複数回行われました。通常は宿泊施設に泊まって親睦を深めています。懇親会には、その河川に詳しい漁協の組合長や名人に講演してもらうこともありました。群馬県の神流川での開催では、松田克久名人に実技指導をしていただきました。

近年、水産試験場や水産研究所でも、若い研究者がアユ釣り離れを起こしつつあることから、15回大会から団体賞、21回大会から30歳以下の参加者を対象に新人賞を設けました。また、23回大会では初めて女性の参加者があり、レディス賞やルアーによるアユイング賞が設けられました。大会の運営はその年の幹事の裁量によるので、毎年趣向が異なる会になっているかと思えます。

参加者が竿を折ることはあり、主に日曜日に釣ることから、アユが釣れないという問題点はありますが、川で流されるなどの事故はありませんでした。2023年の安曇川では、半日

の釣りで 114 尾も釣った参加者がおりました。参加者の技量は年々向上し、近年では各地のアユ釣り大会で優勝したり、広く知られた全国大会で上位入賞したりする会員もいます。

この会の学術的成果としては、2011 年に学報社から刊行された『アユの科学と釣り』があります。片野のほか谷口順彦、海野徹也両先生の編集のもと、多くの会員に執筆いただきました。2023 年には築地書館より『完全攻略！鮎 Fanatic』が出版されました。著者のうちの坪井潤一さんと高木優也さんは本会のメンバーです。各地で開催されるアユ釣り大会では、所属先を「アユの放流と友釣りを考える会」にしてくれる会員もいるので、その知名度も上がってきました。

この会のメーリングリストを使って、単独の水産試験場では解決できない問題を取りあげることもあります。たとえば、種名がわからない魚については、分類の専門家である斉藤憲治さんが答えたり、カワウについては坪井潤一さんが答えたりすることもありました。各地のアユの遡上状況も互いに聞くことができます。国の水産研究所が弱体化し、とくに内水面の中核機関であった上田庁舎が閉庁された現在、本会が果たす役割は大きくなっていると考えています。

本会の参加資格は水産研究機関の職員、アユ釣りを愛好する大学の職員およびその家族です。自分の住む地域の近くで開催される場合にだけ参加する人もいます。誰がいつどこで参加するのも自由ですから、参加希望者は私まで連絡ください。本年度は栃木県で開かれる予定です。



2023 年安曇川にて

